# アジ研における アフリカ研究の特徴と変遷
## ――研究双書を題材に――

佐藤千鶴子

アジア経済研究所（以下、アジ研）は、日本における社会科学分野でのアフリカ研究者の一大集積地の1つである。アジ研の研究者は、研究所内外の研究者とともに共同研究会を組織し、その成果を主として研究双書の形で発表してきた。本稿では、『アジ研ワールド・トレンド』が創刊された1995年以降に刊行された研究双書（以下、双書）をもとに、アジ研におけるアフリカ研究の特徴や変遷について考えてみたい。

### ●民主化・構造調整・紛争

1995年から現在（2017年12月）までに刊行された双書のなかで、タイトル（副題含む）にアフリカないしアフリカの国名がついているものは29冊ある（表）。この表には入っていないが、新興国や発展途上国・地域を広く扱った双書にもアフリカ諸国に関する論文が所収されており、それらを含めると全部で43冊となる。

重要な出来事が起こったり、政策が導入されたりした時点とそれを分析し研究成果として出版するまでにはタイムラグが生じるが、双書のタイトルからは各年代にアフリカで起こった重要な政治経済的課題が研究テーマとして選ばれてきたことがわかる。たとえば1990年代には、冷戦の終焉や民主化（複数政党制移行）がアフリカ諸国の政治体制や国際社会との関係をどのように変えたのか、また、1980年代に導入された構造調整政策は農産物の流通制度や農民の生活にどのような影響を与えたのかが分析された。

冷戦終焉後のアフリカでは複数の諸国で武力紛争（内戦）が勃発したが、紛争の原因は多層的で、戦闘に参加する当事者が離合集散を繰り返すなど非常に複雑な様相を呈した。和平交渉が何度も頓挫し、紛争が長引いた国もあった。2000年代～2010年代前半に出版された複数の双書は、これら紛争の歴史的背景や経緯から、地域機構や旧宗主国といった複数の主体が介入して行われた和平交渉、そして紛争後の平和構築過程を詳細に分析している。紛争や平和構築の分野では、アフリカのみを扱ったものから、アジアや中東の事例までをも含む地域横断的な共同研究へと発展していったという特徴もある。

**表　1995～2017年に刊行されたアフリカ関連研究双書一覧**

| 出版年 | タイトル（著者・編者名） |
|---|---|
| 1995 | 構造調整とアフリカ農業（原口武彦編） |
| 1996 | 部族と国家：その意味とコートジボワールの現実（原口武彦） |
| 1996 | 冷戦後の国際社会とアフリカ（林晃史編） |
| 1996 | アフリカの食糧問題：ガーナ・ナイジェリア・タンザニアの事例（細見眞也・島田周平・池野旬） |
| 1997 | 南部アフリカ民主化後の課題（林晃史編） |
| 1998 | アフリカのインフォーマル・セクター再考（池野旬・武内進一編） |
| 1999 | アフリカ農村像の再検討（池野旬編） |
| 1999 | 新生国家南アフリカの衝撃（平野克己編） |
| 1999 | 南部アフリカ政治経済論（林晃史） |
| 1999 | ガーナのココア生産農民（高根務） |
| 2000 | 現代アフリカの紛争―歴史と主体―（武内進一編） |
| 2001 | アフリカ比較研究―諸学の挑戦―（平野克己編） |
| 2001 | アフリカの政治経済変動と農村社会（高根務編） |
| 2003 | アフリカ経済学宣言（平野克己編） |
| 2003 | アフリカとアジアの農産物流通（高根務編） |
| 2003 | 国家・暴力・政治―アジア・アフリカの紛争をめぐって―（武内進一編） |
| 2005 | アフリカ経済実証分析（平野克己編） |
| 2006 | 人間の安全保障の射程―アフリカにおける課題―（望月克哉編） |
| 2007 | 統治者と国家―アフリカの個人支配再考―（佐藤章編） |
| 2007 | マラウィの小農―経済自由化とアフリカ農村―（高根務） |
| 2008 | 戦争と平和の間―紛争勃発後のアフリカと国際社会―（武内進一編） |
| 2009 | 現代アフリカ農村と公共圏（児玉由佳編） |
| 2012 | 紛争と国家形成―アフリカ・中東からの視角―（佐藤章編） |
| 2013 | 南アフリカの経済社会変容（牧野久美子・佐藤千鶴子編） |
| 2013 | 和解過程下の国家と政治―アフリカ・中東の事例から―（佐藤章編） |
| 2015 | ココア共和国の近代―コートジボワールの結社史と統合的革命―（佐藤章） |
| 2015 | アフリカ土地政策史（武内進一編） |
| 2016 | アフリカの「障害と開発」―SDGsに向けて―（森壮也編） |
| 2017 | 現代アフリカの土地と権力（武内進一編） |

（注）刊行から5年が経過した研究双書は基本的に無料で全文ダウンロード可能。
（出所）アジア経済研究所ウェブサイト（2017年12月7日閲覧）。

## ●農村研究の伝統と変化

各年代を代表するような事象を理解するための研究が行われる一方で、アジ研のアフリカ研究者が継続して取り組んできたテーマもある。その代表的なものが農村研究であり、急速に変容しつつあるアフリカ農村をどのように理解するかを課題としたものが、アフリカ関連双書の実に3分の1以上（10冊）を占める。おそらくその理由は、多くのアフリカ諸国においていまだ人口の大部分が農村に住み、農業を生業としているためだろう。ただし、農村変容を分析する視点には若干の変化がみられる。

1995年から2000年代半ばまでに出版された双書では、構造調整政策による経済自由化、とりわけ流通改革が小農生産に与えた影響が関心の中心であった。農産物流通が自由化されたことで価格や販売経路はどう変化したのか、農民は新しい流通制度にどのような反応をみせたのか、自由化は農民の間に新たな階層分化をもたらしたのか、さらには自由化により農村でどのような新しい経済活動が生まれているのかといったことが考察された。

2000年代末以降の双書では、アフリカ農村社会における住民の関係性や組織形成・参加、あるいは慣習的土地制度と伝統的権威および政府との関係のような農村社会内外の権力関係に着目して農村変容が分析されている。つまり、アジ研の農村研究では、生産面や生業活動から社会関係や政治へと視点の移動がみられる。双書は共同研究会の成果であるから、アジ研のアフリカ研究者の人員構成が変わり、専門性や関心の異なる研究者が共同研究会を組織するようになったことが変化の第一義的な理由だろう。だがそれと同時に、人口増加と大規模な土地取引や囲い込みといったアフリカの農村が直面している課題自体が変化したことも関係しているのかもしれない。

## ●少ない一国研究

表から気づく別の特徴は、アフリカの一国を扱った双書が少ないことである。これまでに出版されたのはコートジボワール、南アフリカ（各2冊）、ガーナ、マラウィの4カ国に限られ、南アフリカを除くといずれも単著となっている。

アフリカの一国研究を共同研究会として組織しにくいのは、社会科学分野でのアフリカ研究者が日本ではまだ数少ないという事情による。だが例外的に南アフリカについては、共同研究会の成果として2冊が刊行されている。最初の双書はアパルトヘイト体制終焉直後に、南アフリカの国際社会への復帰がもたらす意味を多方面から検討したものであり、その後10年以上を経た2冊目は、筆者もかかわったものであるが、アパルトヘイト終焉後20年間の南アフリカ社会・経済の変化を分析している。アフリカの一国を扱った研究書は、特に論文集の場合、読者の市場が限られるという問題が存在する。だが今後、共同研究会の成果がウェブ発信へと移行していくことで、比較的少ない人数で一国の政治経済を分析する共同研究が増える可能性はある。

この間に双書の表紙は2度変わった（筆者撮影）

## ●新しい研究手法やテーマへの挑戦

最後に、多様なディシプリン（専門領域）の研究者を集めてアフリカと他地域を国際比較する、あるいは地域研究者と経済学者が共同でアフリカ経済を分析する、といった他ではあまりみられない試みがアジ研で行われ、その成果が双書として刊行されてきたことも指摘しておきたい。研究テーマに関しても、アフリカの独裁的な統治者個人に焦点を当てたり、開発の分野ではあまり取り組まれてこなかった障がい者を取り巻く状況を明らかにしたりといったように、広がりをみせている。

アジ研内でアフリカ研究に取り組む人員の構成が変われば、それにともなって新しいテーマへの挑戦が起きるのは当然である。それと同時に、都市化やグローバル化の進展によって研究対象であるアフリカ自体が変化を続けるなかで、今後は都市化やジェンダー、移民・難民、世代間関係、宗教などのような、まだ双書として成果が刊行されてはいない分野でも共同研究会が組織されていくに違いない。

（さとう　ちづこ／アジア経済研究所　アフリカ研究グループ）